



あまの鬼

三



遠江  
1718  
3



門 へ 13 待  
辨 1718  
卷 3



第三

石白先分と大黃が毒と判夜まらるる



なまもも湯を山よ白先分とくしよ異人ありり八十人に  
あつらふ日八味と喰ひ文のさる八尺八寸糸と後り  
眼統て十六ありて大判を並べてててお好たおはへつ  
わりその菌南藻とあらぐててて奥菌め及派と菌ごと  
し子足者十六あり十六のよとりつて播付八寸糸と如て  
宮と者村一対十六の書と清くごよよ十二の葉と採天性醜め  
敵智少くく一と吹て百と知り一習へおま子と製法を坊  
系蒸をわごころりあし忙年はら河茶院が船子系系  
國と経歴系系らるるを諸子そくをゆり今七湯小伝そ

水之巻三

二

善惡指南所とて看板とて天地を謂ふは善惡を教く  
好子好く悪子と云ふ子一人一付子八の業を教ふる人善  
も善と云ふは八極証も説く逐天狗鼻も厭するも似たり善惡を  
巡るるもあふ印なり又清龍を云ふもさうて印せん  
りやうりい男大善が毒と憎む引初て細末し  
くもんぞと大善小向て云て曰仏尼と粉如堂塔羅寺院  
と滅しと地と狼して新田と辟けは天地に同謀あり益多  
しこの云ふがーはも理小仲らるんぬれども汝てさ乃下  
くのいして天下の政と説くとまら八位を知らざるればおこ  
南村仏尼の死とあふの大要の死とまらしむる仏尼と稱し  
是とそ守敬さまら八先祖と云れぬら子孫小長引と勸の

大法の思これが大善三世大の周縁く是と大の善ありと  
誘等多かれども天地のる小唯一つ已るを地ざるのあり流バ  
善人善と云へども善小過して死あり陰徳あれも陽報  
のまらざる者あり徳とちやせども存して適れ一生安樂に  
流とありはけりて是とも天合くといひもさされは流天を  
恨く凡天下に智者八賢愚者多し十人の智者八天合に悔く  
恨くし妙りの百善の愚人の皆天を恨く是已るを地ざる乃  
大ある者小ありまや是とつてのこの世の説くは是も説く  
それバ吾も又十余年もはとつれをまらぬ如來の流法ハ  
可憐そ守者か廻て善と斗がねを乃ありやとある我く  
く凡凡ありと量知るべにありまらぬ小汝仏尼と稱し新田と







山崎闇斎

山崎闇斎

五

五









りんが火折箱より焼く出で石印定本未濁て白くぬぐい  
 瀧の判官が下官水戸の山の火出とや者くより判官定本の  
 湯とぬぐい秘蔵する乃自天八平令百令乃至十令おひくる  
 然とも一年子一夜づつ去用テ不あるまうひくみ年七十年子  
 毎一海人の利と是の或付利休が茶抄吾小評て曰五世の  
 茶入茶碗とちとえと美細く煙石を果報人之彼をくを  
 人る八日もさざし秋を八ま子引く或二重路の右端深に  
 纏りれ或八拂小包まかれて是の湯子押巻られ日の月さく  
 飛るのつらむ口利や世界の死ねとあつとも茶の湯の同  
 襪をよはらうとぬぐい秋と又と地獄子流で人子衆んを  
 進る乃りくちぬぐいも鬼おれと一火折箱子あつて

天然と流るるの湯とさうと竹の花生とせ小竹歴の注を  
 流るりぬぐいの各皆人るの乃子有而可無而可く家と  
 瀧と進の花よりつて火とさうと竹の花生とせ小竹歴の注を  
 神氏本と潜て火とさうと民小説念と教也秋乾少くと  
 様八玉の神物と化海底不入底の波途と昨出天の八十毗ん  
 ぬぐい海布の柄と漢煙石とぬぐい海尊の柄とぬぐい  
 ぬぐいて火を潜おまるとくふと不おひく遠く今この煙るハ  
 海より子ヨキリとさくくバ蘭穀の度小移て火とぬぐい速く  
 利便利の某一日とすれが竹のぬぐい天卜才一の宝物さく  
 小ねくりのわくくや枝小く速く八文と極定とあり  
 火は小くて八僅一又くく二代の為價令とくぬぐいぬぐいの



又上宝の状玉あり憂い入るも是と欲くむけぬぬ玉の良  
と求せられ申分も通用せぬ物と大金と賈す一宵とあり  
味旨と揚ぐ又育するやいり思言とやいり人麿を多と人玉  
應るより一宝と抱ぬ人否か 是とくわれが後ともあぬ  
厚物とも令とありて求るより及りぬるゆゑに費す条乃  
端のし小陽も能れ子無語を在香歌年物操琴と味旨  
揚弓は印揚て計に難とす多能言皆有而可き而可く悲  
天下の同襪ありあふてふちる条の湯一とあげて小を  
りつゝ多能言もむかあるゆゑに思ふに一物に外を求る  
灰子令眼ハ袋等持ても其ころころゆか 是とくあふか  
あふ上ち下と信使一ト上と求むてもまねとく一と云ふ

皆これ世の神のとりしるこいへん思ふと名のあるりの  
驕と進るより多能言も一林もハ朔よりつゝ朝水多ハ夜  
りつゝ病入疔あち力を納るの穴ふらり花と吸虫ハ花の節を  
食むら魚ハ其ものち多と不意及ハ花乃ち多と清るゆ  
か一人あふちし小かりてつゝざる物と欲ぐくぬ日其年のハの毫  
中一少曰人するの状面乃面の皮を剥ぐりつゝ涙子割られ  
屋の華よりりも初厚一能あ好とまら奴もハ座と吐掛く  
通るく一上士丸連つりも襪一と云く欲と勸性と襪もハ  
能く多よりりもぬかあ一とく又酒物棄傾壊けつとつれ  
總て能小いゆべいといつた能く多もあふも人乃あふも  
能く多と梅者ハ敢り高酒子あるゆゑさうハ乃ら一と

ありて人の教ふも成るるありてはこゝろを害するの  
ありて盗人子逆を揚ぐ或下戸高酒客のあそびをば  
おもしろし如き酒の香を堪えざるは氣乃油揚を  
と不揮大子如き酔く怒る虎小うぞ酔く浮るは氣  
と之り又梳久くつるあり人苗も難と相へ  
笑くうぞ難八目と吾子昔く為く傾城ハ吾子今  
く抱竹く歎昔子今に耐後く指さして答ふ  
情香ハ酒よりと思へし一在子寒食白酒善されど  
あり人は容るんやと思ふ情香ハ盗人ありされど大に  
人を剥んるやと思ふやと天々の法度されハ別  
取とくくありるも乃りまきりあぐ小情香ハい

大情香ハチても可くしやれやとされハ古語子田小情香  
ハめとこ一火情香ハ國を流るるくうは子孫子孔明長  
良等天子の明るる國と二六子孫込く天子と措措計救く  
舟の桓公晋の父公をばハ情香の通く日本の義経楠ありハ  
舟の務と曉は逆せし業あり周の武王ハ情香あり乃  
氏神くさる氏あどもをさるる中子小情香ありと  
某の某双六ハおもはるる及んば情香より隠其の業  
ちれば外らるるも及んば石橋と勤る抱きと生業とち  
しと世と後る人く天下ありとさるるも橋者の分  
のよめと不念鳥獸の性と害し頗流るる浄ひし仲る  
味の友吟絶を耕をく抱きく吟ひ獄をく吟ひ

腹て而作と在は者と悔り夕偶人として小異名と与て大の  
 大法と胡蘆の如く作らむる高興悠々木糟のてし騰く  
 人の月と時——茶物の性と言はるるが子使らるるを  
 茶の本質許の如くや盛衰記の初は白馬の蹄からられ  
 して時子茶葉の茶を逐感と云ふは是等の如の人を斗り  
 茶は是の如く人茶と茶物より貴とす人茶を茶  
 われと茶ハ湿つて火口へ色あつて火を赤くあつてくふ  
 く茶は如く茶をくられ



心之鬼第三終

